

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 17 日現在

機関番号：34603

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24720309

研究課題名(和文)長門鑄銭司の実態解明による古代官営工房運営システムの研究

研究課題名(英文)Research on management system of ancient national factories in Japan based on a survey of the Nagato Mint

研究代表者

竹内 亮 (TAKEUCHI, Ryo)

奈良大学・文学研究科・研究員

研究者番号：10403320

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、長門国に置かれた古代日本の官営銭貨鑄造組織である鑄銭司を主たる研究対象とし、その実態や他の生産組織との比較を文献史学と考古学の双方の視点から研究することにより、古代日本における官営工房の運営システムの解明を目指した。その結果、長門鑄銭司では他の古代官営工房(飛鳥池工房、長登銅山)と同様の工人管理システムが採用されており、このシステムが古代日本の官営工房で一般的であったことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study was made to clarify the management system of ancient national factories in Japan based on a survey of the ancient mint at Nagato prefecture (known as "Nagato Chusenshi" or "Nagato Jusenshi") and other ancient factories in Japan by historical and archaeological methods. In conclusion, this study has demonstrated that any ancient national factory in Japan has general system to manage workers.

研究分野：日本古代史

キーワード：出土文字資料 官営工房 官衙 長門国 木簡 文字瓦 鑄銭司 長登銅山

### 1. 研究開始当初の背景

本研究の開始に先立って、以下のような研究実績を積んでいた。

(1) 奈良文化財研究所(以下、奈文研)に研究担当職員として在職中(平成14~17年)以来、継続して飛鳥池遺跡(奈良県明日香村飛鳥)出土の7世紀後半頃の木簡群に関する研究を行っており、天武朝期を中心とする時期の国家的工房の運営システムに関して一定の見通しを得ていた。

(2) 若手研究(B)「長登銅山跡出土木簡を用いた古代官営工房運営システムの解明」(平成19~22年度)が採択され、長登銅山跡(山口県美祢市美東町)より出土した8世紀の木簡群の釈読を通じて、古代長門国における官営銅生産工房の運営システムに関する分析を行っていた。

本研究ではかかる既往の研究成果を踏まえ、長門鑄銭司跡(山口県下関市長府)から平成22年に出土した木簡の釈読と内容分析を試みようとした。本研究の開始時点では、発掘調査担当機関である下関市教育委員会によって出土木簡のうち1点のみの釈文が公表されていたが、他の木簡については調査が及んでいなかったため、これらを釈読することで調査担当機関による発掘調査成果公表に寄与できることを期待し、研究を開始した。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は主に以下の2点であった。

(1) 長門鑄銭司跡出土木簡の釈読と分析を通じ、古代における長門鑄銭司の活動実態を明らかにする。

(2) 他の工房遺跡や生産遺跡などからの出土文字資料と長門鑄銭司跡出土木簡とを比較検討し、古代工房において全般的に共通する運営システムの存在を明らかにする。

### 3. 研究の方法

本研究で実際に採用した方法は以下のとおりである。

(1) 長門鑄銭司跡出土木簡の釈読に際しては、当初は本研究経費を用いて光学機器等を調達して実施する計画であったが、本研究機関とちょうど重なる時期に主要な木簡の保存処理が実施されることとなり、調査担当機関である下関市教育委員会から保存処理が奈文研に委託された。そこで当初の計画を変更し、保存処理に伴って奈文研で撮影された木簡のデジタル画像を元に釈読を行うこととした。

(2) 7世紀後半の天武朝期を中心とする時期の国家的工房遺跡である飛鳥池工房遺跡

(飛鳥池遺跡南地区)および8世紀の官営銅山遺跡である長登銅山跡から出土した製品生産に関係する木簡を比較対象として用い、長門鑄銭司跡出土木簡と共通する要素の抽出を試みた。また、宮宅・官衙・寺院などの造営事業を個別に検討し、古代における造作事業全般についての包括的検討を行った。

### 4. 研究成果

(1) 長門鑄銭司跡出土木簡の釈読については、奈文研で撮影された木簡デジタル画像の熟覧により、釈文の私案を得ることができた。また、この釈読私案にもとづき、長門鑄銭司では飛鳥池工房ならびに長登銅山と同様の工人管理システムが採用されていたという見通しを得た。ただし、本報告書提出時点ではまだ下関市および奈文研から木簡の保存処理成果に関する公式発表がなされておらず、釈文も公表されていないため、具体的な釈文私案および分析内容の記載は差し控える。これらについては、関係機関からの公式発表を待って発表することとしたい。

(2) 著書・論文・学会発表ごとの成果は以下のとおりである。いずれも、宮宅・官衙・寺院などの造営に着目し、出土文字資料を用いてそれらの個別的な実態解明を試みた。特に重要な成果として、寺院造営における知識結集の役割を解明した点があげられる(著書・論文・学会発表など)。これらの研究を通じ、地域の公私にわたる様々な社会関係が知識結集の基礎となり、造寺・造像・写経・架橋といった多くの作善が行われたことを示した。官司による公的事業とは異なる面から古代における造作の実態を明らかにできたことで、古代のものづくり全般の中で官営工房を相対的に位置づけるという巨視的な視点を獲得することができた。また、いずれの研究でも出土文字資料を主要な史料として用いた。これらの研究成果を通じて、歴史研究における出土文字資料の史料としての有効性を示すことができた。

#### 『日本古代の寺院と社会』(著書)

日本古代における寺院の機能や役割について、寺院内外の社会との関わりから考察した。本書で取り上げた寺院は、古代都城の中央寺院である大寺、地域社会との深い関わりによって建てられた地方寺院の2種類である。まず中央の大寺(第一部)については、飛鳥寺が残した木簡群を主な史料として、7世紀後半における飛鳥寺内部の人的構成を具体的に復元(第一章)、飛鳥寺をモデルケースとして、都城において大寺が国家から期待された役割を評価(第二章)、都城近郊中小寺院と大寺間の僧侶往還による関係性の解明(第三・四章)、大寺を含む都下寺院の法制的な位置づけ(第五章)といった多様な観点から分析した。これにより、古代都城における大寺の地位と機能、大寺の内部組織から近

郊諸寺にまで及ぶ僧侶集団の具体相、大寺制と都城制の関係性などを明らかにした。

次に地方の寺院（第二部）については、仏像銘文や寺院跡から出土した文字瓦などを主な史料として、地方寺院の造営主体と造営手段を解明した（第一・二章）。その結果、旧国造層や新興勢力を含む様々な地方有力者（檀越）が地方寺院造営を発願したこと、造営に際しては地域の労働力や技術を知識として結集し、なおかつ知識結集を介して檀越の下に地域の人々を結合することが意図されていたことを述べた。また大小様々な勢力が寺院造営を発願した結果、コホリ規模からサト規模まで知識の結集範囲が様々な規模に及んだことを明らかにした（第三章）。さらに、こうした日本古代の知識結集の起源が三国時代の高句麗や百済に求められることも指摘した（第四章）。

本書は、研究成果公開促進費（学術図書）の交付を受けて出版した（課題番号 15HP5078）。

#### 「官営採銅事業と地域社会の変容」

（論文・学会発表）

8世紀初頭に始まる官営採銅事業では国家による独占的な銅生産が行われたが、これは7世紀前半頃から存在した民間の銅生産技術者集団を役丁として徴発し採銅所での労役に従事させたものであり、徴発範囲は採銅所所在郡にとどまらず長門国・豊前国一帯の産銅地に広く及んだと考えた。そうした民間技術者の国家による再編の結果、一部の産銅地では民間技術者集団が消滅し、技術の継承に断絶が生じた所があると指摘した。

#### 「古代の地方寺院と社会集団」

（論文・学会発表）

『日本霊異記』に収録された紀伊国名草郡の説話から、サトやムラの名を冠する寺院が登場する話を選んで検討し、これらの小地域は寺院を支えた知識の結集範囲と一致することを指摘した。また、知識結集は一回限りのものではなく、造寺・造像・修理などの必要に応じて再結集され、資金や労働力を集めて事業を遂行するという継続性があり、知識が寺院の経済的運営に協力する場合には長期間持続することもあると指摘した。

#### 「石川宮考」

（論文・学会発表）

飛鳥池遺跡と藤原京衛門府跡から出土した複数の木簡に見える「石川宮」について、この宮の主を蘇我姪娘（蘇我石川麻呂の娘、天智天皇のキサキ、御名部皇女・阿閉皇女の母）と推定した。この石川宮は、姪娘が将来文武天皇の祖母となることを見越して石川麻呂没官財を文武天皇へと相続させるための家産形成拠点であったと考え、淵源は蘇我氏の石川宅であろうと指摘した。また、その家産は山田寺造営にも用いられたと考えた。

#### 「越前国足羽郡糞置村開田地図の現地比定」

（論文）

奈良時代の東大寺による墾田開発を記録した越前国足羽郡糞置村開田図について、研究成果の整理と最新研究段階の提示を行い、開田図に記された条里プランと実際の水田地割の対応関係を検討した。その結果、糞置村一帯では足羽郡統一条里方位とは異なる斜行・不整形地割に即した条里プランが施行されたと見る説が妥当と指摘した。

#### 「地方官衙と歌木簡」

（論文・学会発表）

秋田城跡出土の歌木簡について、同伴する荷札木簡の実物調査に基づく新釈読案により、木簡群の年代が通説より遡る可能性があることを指摘した。また、歌木簡は現状で歌が表裏とも同一側に寄せて記されていることから、元来はその反対側方向にもう少し幅が広がり、表面は少なくとも二首以上の歌が記されていたとした。用途としては、新春儀礼において唱和される歌の記録、準備、歌集からの抜書など複数の可能性を指摘した。

#### 「文献からみた片岡の古代寺院」

（学会発表）

大和国片岡地域の古代寺院のうち、片岡王寺について検討した。推古朝施入の播磨国所領が後代の法隆寺領鶴荘絵図中に片岡荘として記録されており、その荘域を復元すると、元来法隆寺の鶴荘と一体的な所領であったことが判明した。このことから、片岡王寺の檀越を上宮王家の一員である片岡女王（聖徳太子の娘）と考え、『法隆寺資財帳』に見える灌頂幡を寄進した「片岡御祖命」と同一人物とみる東野治之説が妥当とした。

#### 「東大寺の末寺について」

（学会発表）

『東大寺要録』末寺章第九（巻第六）の全文釈読と解釈を通じ、末寺章は東大寺要録編纂時点で東大寺末寺であった寺院を掲げたというよりも、東大寺の権益確保のため末寺であることが望ましい寺院を列挙したという性格が強く、むしろ本章を根拠として末寺支配が強化された側面があると指摘した。

#### 「河内六寺と知識」

（学会発表）

大阪府柏原市鳥坂寺跡より出土した文字瓦の記載「飛鳥評志母乃五十戸」を題材に、鳥坂寺の所在郡である大県郡には鳥坂寺を含め郷（五十戸）名を冠する古代寺院が列立していること（河内六寺）、河内大橋の知識架橋や智識寺などの存在から河内六寺は全て五十戸を基礎的結集範囲とする知識によって造営された可能性があることを述べた。また、栃木県那珂川町那須官衙遺跡（下野国那須郡家跡）および神奈川小田原市千代廃寺（相模国足下郡家隣接寺院跡）から出土した

「五十戸」銘文字瓦の実物観察を行ったので、その結果を報告し鳥坂寺文字瓦との異同点について述べた。

「出土文字資料から見た摂津国菟原郡」  
(学会発表)

神戸市東灘区深江北町遺跡第9次調査で出土した墨書土器・木簡の実物観察を行い、その結果を報告した。墨書土器では「駅」を記した字に繁体の「驛」と略体の「駅」の双方が確認できること、木簡では「駅上米」と読める可能性のある米の荷札木簡を見出したことを述べた。また、深江北町遺跡が通説どおり葦屋駅家跡であることを確認し、文字資料が出土した一帯には駅家に伴う厨、事務部署、倉庫などが立地していたと推定した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計9件)

竹内 亮、官営採銅事業と地域社会の変容、古代日本とその周辺地域における手工業生産の基礎研究、査読無、2016、pp.261-274

竹内 亮、古代の地方寺院と社会集団、美浜町歴史シンポジウム記録集 10、査読無、2016、pp.7-14

松葉 竜司、門井 直哉、竹内 亮、梶原 義実、中野 知幸、小林 裕季、座談：再論、若狭の古代寺院 遠敷郡の古代寺院、そして興道寺廃寺、美浜町歴史シンポジウム記録集 10、査読無、2016、pp.65-74

竹内 亮、石川宮考、日本古代のみやこを探る、査読無、2015、pp.366-390

竹内 亮、新刊紹介 西本昌弘著『飛鳥・藤原と古代王権』、古代文化 67 巻 1 号、査読無、2015、p.161

竹内 亮、古代・九(史料 出土史料)、史学雑誌 124 編 5 号、査読無、2015、pp.63-66

竹内 亮、越前国足羽郡糞置村開田地図の現地比定、古代学協会研究報告第 11 輯、査読無、2015、pp.79-86

竹内 亮、新刊紹介 市大樹著『飛鳥の木簡 古代史の新たな解明』、古代文化 65 巻 1 号、査読無、2013、p.156

竹内 亮、地方官衙と歌木簡 秋田城跡出土歌木簡をめぐって、万葉古代学研究年報 11 号、査読無、2013、pp.135-144

〔学会発表〕(計8件)

竹内 亮、古代の地方寺院と社会集団、

平成 27 年度美浜町歴史フォーラム 再論、若狭の古代寺院、2015.10.25、美浜町生涯学習センター(福井県三方郡美浜町)

竹内 亮、文献からみた片岡の古代寺院、第 32 回古代寺院史研究会、2015.4.26、香芝市二上山博物館(奈良県香芝市)

竹内 亮、石川宮考、日本史研究会古代史部会、2015.1.26、機関紙会館(京都府京都市)

竹内 亮、東大寺の末寺について、第 8 回東大寺要録研究会、2014.3.16、東大寺総合文化センター(奈良県奈良市)

竹内 亮、長登銅山跡出土木簡から見た古代の銅生産 官営工房としての長門国採銅所、日本古代宮都周辺域における手工業生産の分野横断的比較研究 第 3 回研究会、2012.12.26、大阪大学文学部(大阪府豊中市)

竹内 亮、地方官衙と歌木簡、第 9 回万葉古代学公開シンポジウム 声から文字へ 木簡に記された詩歌と古代東アジアの詩歌の場、2012.9.29、奈良県立万葉文化館(奈良県高市郡明日香村)

竹内 亮、河内六寺と知識、第 21 回古代寺院史研究会、2012.8.19、柏原市立歴史資料館(大阪府柏原市)

竹内 亮、出土文字資料から見た摂津国菟原郡 深江北町遺跡と葦屋驛家、第 19 回古代寺院史研究会、2012.5.6、芦屋市教育委員会三条事務所(兵庫県芦屋市)

〔図書〕(計2件)

竹内 亮、塙書房、日本古代の寺院と社会、2016、352

筒井 寛秀(監修)・東大寺続要録研究会(編纂・校訂)、国書刊行会、東大寺続要録、2013、375(pp.3-6(造佛篇)、pp.287-314(寶藏篇))

〔その他〕

辞書項目執筆  
木下正史(編)、吉川弘文館、飛鳥史跡事典、2016、333(pp.173-174(壺阪寺)、pp.270-272(大神神社)、pp.285-287(海石櫛市))

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

竹内 亮(TAKEUCHI, Ryo)

奈良大学・大学院文学研究科・研究員

研究者番号：10403320